

魔物まものと小豆あずき

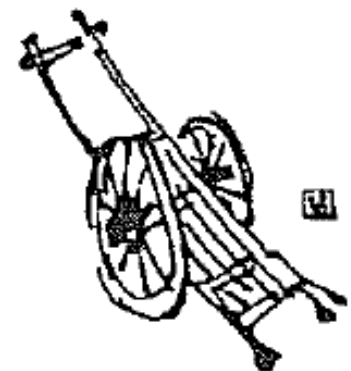
坂本から岩崎いわさきへの道は、城山の山すそを巻くようにのびている。その中ほどあたりのさびしいところに、花岡神社がある。

そのむかし。

うっそうと木が茂り、いつ通っても気味の悪いようなところだったが、その神社の森に何やら魔物まものがいて、道を通る人をたいそう困らせていた。

しかし、その道を通らなければどこへも行けない村人たちは、こわがってばかりいてもしかたがないので、何とかならないものかと相談の結果、村でいちばん元気そうな若者のところへたのみに行った。

村の長老おやぢたちにたのみ込まれた若者は、ことわるわけにもいかず、魔物退治まものたいじを引き受け



はしたものの、さて、どういうふうにして退治したものかといろいろ思案した。

ところが、なかなかよい方法が見つからない。困っている若者に、父親がよい知恵をさずけてくれた。

「よし、これならやつつけられるぞ。」

と喜んだ若者は、その夜、早速花岡神社の境内（境内）に行つて、森に向かつて大声で叫んだ。

「おい／＼よく聞け魔物。おれが相手になつてやるぞ。勝負は三日後の真夜中じゃ。わかつたか！」

若者の声は、ヒューという風の音と共に、森の中に吸い込まれるように消えていった。

いよいよ魔ものとの勝負の日、若者は、母親に小豆を炒いつてくれるように頼んだ。

「いいか、魔物退治は力ではないぞ。度胸どきょうだぞ。度胸どきょうで負けたら、おめえの勝ちめはないぞ。」

と教えてくれた父親の言葉を思い出しながらまっくらやみの中を、母親に炒いってもらつたその小豆をふところにして歩いて行つた。

花岡神社の森に近づくと、若者はふところの小豆を一にぎりつかんで口の中に入れた。

そして、さもろまそろにパリンパリンと大きな音をさせながら、とうとう花岡神社の森の



中へ入っていった。

炒いった小豆はとても固くて、かむととても大きな音がするそりな。

度胸負けはしたくないとは思っても、やはり気味の悪い気持ちをなくすることのできない若者。それでも自分の心に勇気をふるいおこすように、力をこめて小豆をかんだ。

バリン、バリン、バリン、バリン

また一にぎり口に入れて、

バリン、バリン、バリン、バリン

しんと静まりかえった真夜中の森に、その音は異い様な感じで響ひびきわたっていった。

そのとき、一陣いちぜんの風と共に、ザワザワと木の葉のゆれる音がして、森の奥おくから魔物まぶつの聲がした。

「おまえは何者だ。」

「おれは村の若者だ。」

「何をうまそうに食つとる。」

「とつても、うめえもんじゃ。」

「そんなにうまいのか。」

「そりゃあうめえだよ。」

若者は、また一にぎり口に入れると、

バリン、バリン、バリン、バリン

若者は、少しでも音が大きくなるように、

力をこめて小豆をかんだ。

「そんなにうまいもんなら、わしにもよこせ」

おどかすような魔物の声が強く響いた。

それきたと、内心小おどりした若者は、口

ではめんどろくさそりに、

「しょうがねえなあ。そんならみんなやるけ



ど、おめえには食えるかどうか心配じゃ。」

と言いながら、用意しておいた小石の入ったふくろを、ポーンと森の奥に投げ込んだ。

しばらくすると、魔物がそれを口に入れてかむ気配がした。いくらがんばっても歯がたつはずがない。小石をかみくだこうとがんばっている魔物に、

「おい、そろそろ勝負しようじゃねえか。」

と若者が言うと、

「こんな固いもんを平気で食うようなやつには、とても手が出せん。」

と言って、魔物は自分の方から逃げていってしまったげな。

それからは、もう安心してこの道が通れるようになったということじゃ。